

【論 文】

# 四技能を駆使した日本語の高次能力育成型反転授業の試み†

## —Zoom と Moodle を併用した協働学習の実践—

早野 香代\*

三重大学人文学部\*

本稿は、留学生対象の高次能力育成型のオンライン反転授業を報告する。学部の専門授業への橋渡しの役割を担う日本語の授業で、既習の語彙や文法の知識を活用し、四技能を駆使した発展的な活動ができる「高次能力育成型」の反転授業をデザインした。この反転授業は、Moodleの事前学習でニュースを読み、Zoomの授業で要旨発表、語彙解説、質疑応答、議論を行い、終盤は司会進行も学生が試みた。シラバスは、トピックとスキルの折衷シラバスで、トピックは教員が提供し、語彙や議題は学生が抽出し、後行シラバスを作成した。実践したスキルは、事前に資料を読む、PPTにまとめる、授業で発表・質問・議論する、聞く、授業後にコメントを書くなどがあった。学生の授業後の振り返りからは、面白いや楽しいという肯定的な意見の他、四技能の向上や、他の技能への連結や拡大の成果も報告され、オンラインでも四技能を駆使する反転授業の可能性が広がった。

キーワード：反転授業、高次能力育成型、四技能、折衷シラバス、Zoom、Moodle

### 1. はじめに

2020年5月、新型コロナウイルス感染予防対策のため、三重大学でも対面授業がオンライン授業になり、筆者の担当する「日本語と日本社会A」の授業も、新たに導入したZoomと以前から学内で活用されていたLMS (Learning Management System 学習管理システム)のMoodleを併用することになった。本科目は、対面授業で学生の能動的な参加を取り入れたアクティブラーニング<sup>1)</sup>を活性化することによって、留学生が日本語の四技能(読む・書く・話す・聞く)を身につけ、総合的な日本語運用能力を高められるよう、2018年後期より反転授業を行っていた。事前に読解資料を読んでおくことによって、対面授業においてグループでの学び合いや教え合いが可能な協働学習<sup>2)</sup>の時間を多く取れるからである。

しかし、オンライン授業となると、従来の対面型の授業と異なるため、学生のオンライン環境の問題や主体的な協働学習が実現可能であるかという懸念が生じた。

オンライン環境については、受講する学生が国内外の留学生であるため、国や地域によって環境が異なり、予期せぬトラブルやインターネット回線が不安定になるという事態が想定された。これについては、オンライン上のトラブルがある場合にも対応できるよう、これまでの読解資料に加え、課題も事前にMoodle上に提供し、トラブルがあった際には、資料を読み課題を提出することで対応

する対策を講じることにした。仮にトラブルがなくとも、予習をすることで基礎知識を共有し、学生同士のコミュニケーション活動に入る前に、共通の基盤を築くことができる。この基盤が築かれることによって、Zoom授業で、面識のない学生間でもコミュニケーションが取りやすくなるのが期待できる。

しかし、主体的な協働学習については、オンラインで試みた経験がなく、未知の領域であった。通常、Zoomによるオンライン授業というものは、ホストである教員によってミーティングが進行されるため、参加者である学生は受け身になってしまう可能性がある。さらに、Zoomの機能のブレイクアウトルーム<sup>3)</sup>でグループ活動が可能とはいえ、対面ではないオンラインでどこまで活性化できるかも予測困難であった。

そのような不安を抱きながら、学生が最大限日本語の四技能を駆使して参加できる反転授業のデザインを検討したのが、本稿のMoodleとZoomを併用した協働学習の実践である。内容面においては、学習シラバスを学生自身に作成させることによってより学生主体の授業を実現し、技能面においては、発表・質問・議論など自ら話す機会をZoom授業で多く設けることによって学生が能動的に参加することを目指す。本稿では、その実践を報告し、ZoomとMoodleを併用した協働学習の反転授業における可能性を探る。

表1 完全習得学習型と高次能力育成型の授業デザイン例

教育活動	学習活動	
	完全習得学習型	高次能力育成型
事前活動1	●講義動画視聴	<教える>
事前活動2	●該当箇所のノート作成	<わかった
事前活動3	●演習問題への解答	<つもり>
対面活動 (4人1組の 協調活動)	●演習の続き ●教員による個別チェック ●演習の解答説明/講義	繰り返し 揺さぶる <わかった>
達成目標	事前学習の内容を対面授業において繰り返し考えることで定着させる。	事前学習で得た知識を活用し、対面授業ではさらに発展的な活動を行う。
長所・短所	学生の<わかったつもり>を<わかった>へ再構築する条件を満たせば、教員の個人技の関与が少なく、比較的授業デザインが容易。	活動基盤となる知識や共通認識の構築を動画化することで、対面授業での活動に多く時間が割けるが、担当教員の力に大きく成果が依存する。
分野・領域	知識の積み上げを基盤とする自然科学系	演習・調査ケーススタディを伴う系、他PBLなど

森 (2015: 55-56) 表1と表2を引用し一部改変

## 2. 反転授業の2種類のデザイン

20世紀後半にアメリカで生まれ、草の根で広まった反転授業を、本稿では「説明中心の講義などをeラーニング化することで学習者に事前学習を促し、対面授業では理解の促進や定着を図るために演習課題、または発展的な学習内容を扱う授業形態」(森 2015: 52) と解釈する。

現在の反転授業は、表1のように、大きく分けて次の2つのデザインがある。一つ目は、「完全習得学習型」で、ある教育内容のレベルを受講者全員が達成することを目標に掲げ、事前学習で学んだ内容を対面授業のアクティブラーニングで定着・発展させる方法である。

- ①事前の動画講義による<教える>を通じて学生個々の<わかったつもり>状況を作る。
- ②対面授業のグループワークにおいて、その<わかったつもり>を揺さぶる。
- ③躊躇やとまどいを通じて新たな<わかった>を再構築する。

上記3つの条件を満たせば、教員の個人技が関与する余地が少なく、比較的授業デザインの転移が容易なタイプで、知識の積み上げを基盤とする自然科学系の学問領域での導入で成果をあげている。

二つ目のデザインは、「高次能力育成型」と言い、事前学習で得た知識を活用し、対面授業ではさらに発展的な活動を行うことを目的としている。演習や調査ケース

スタディを伴う学問分野に親和性が高く、PBL (Project based learning, プロジェクト型学習) 等のアクティブラーニング授業に導入できる。その活動基盤となる知識や共通認識の構築の部分を事前学習とすることで、対面授業でのアクティブラーニングには、多く時間が割ける。よって、知識を前提とするアクティブラーニングには、大変有効だが、対面授業をマネジメントする担当教員の力に大きくその成果が依存している点が課題である。(森 2015)

知識や技能を活用するには、書く・話すなどの能動的な活動が必要であり、それらをプレゼンテーションなどの発展的な活動にするためには、仲間との協働の学習が重要と筆者は考える。「高次能力育成型」であっても、仲間との学習の中で、「完全習得学習型」に現れるような<わかったつもり>状況のものが<わかった>に再構築される可能性や、異なる視点を共有することでより高次の思考に発展する可能性があることを期待するためである。

## 3. 日本語教育における先行研究

近年はアクティブラーニングの広がりに伴い、対面授業においてグループ学習を導入したデザインが多く、日本語教育においても多様な形態の実践が報告されている。

古川・手塚 (2016) は、上級学習者対象の文法教育において、講義動画に練習問題を加えた予習を課し、授業では学習者の産出、フィードバックの機会を多く設け、反転授業の形態が効果的なことを明らかにした。中溝 (2017) は、中上級文法クラスにおいて、解説ビデオを事前に視聴し、ビデオ内の穴埋め文と Moodle の練習問題を課題と

し、対面授業では小グループで練習プリントを共同で行い、授業最後に教師がクリッカーで回答を解説した。ここでは、効率性や対面授業での練習の多さを評価するコメントもあったが、グループワークへの消極性が指摘されるコメントもあった。鈴木(2018)は、初級日本語授業において、オープン教材を活用した反転授業で「て形」の導入・練習を行い、学習者の発話時間や自由な発話の機会が増えることで、授業に対する満足度が上昇することが明らかになったと報告している。このように、上級・中級・初級のどのレベルにおいても、語彙や文法を扱う反転授業の試みが多く、これらは全て「完全習得学習型」であった。

一方、「高次能力育成型」には、国内の大学における日本語教員養成(篠崎 2014, 2015)や日本文化(劉 2020)の授業、タイの大学での日事情の非同期型のeラーニング(吉嶺 2019)などがあり、対面授業で、篠崎(2014, 2015)は課題探求学習や課題解決学習を、劉(2020)はプレゼンテーションを、吉嶺(2019)はディスカッションを行った。これらは、事前学習で得た知識を活用し、発展的な活動を行っている。

これらの報告から、学習する分野・領域によって適した授業デザインがあることがうかがえる。筆者が担当する科目「日本語と日本社会 A」は、学部における専門の授業への橋渡しの役割を担う日本語の授業であるため、学習者がこれまで個々に積み上げてきた語彙や文法の知識を活用する必要がある。よって、「高次能力育成型」の授業が適していると判断し、その実践を試みた。

#### 4. 「日本語と日本社会 A」の反転授業

##### 4.1. 反転授業の概要

「日本語と日本社会 A」の科目は、日本の社会や文化、また日本人の思考や行動様式を理解するための教材を読み、発表や意見交換などの活動を行う。留学生が学習・研究活動に必要な日本語の四技能(読む・書く・話す・聞く)を身につけ、総合的に日本語運用能力を高めることを目的としている。この科目は人文学部の自由選択科目の一つで、留学生の日本語レベルの条件は、新聞が読め、日本語でレポートが書ける程度である。

2020年前期履修した留学生は、人文学部の正規生3名、人文学部及び国際交流センターの特別聴講学生14名の計17名で、国籍は中国15名、韓国1名、マレーシア1

名であった。日本語の習得度が日本語能力試験1~2級保持者、もしくはその取得を目指す者と多様であったため、教え合い、助け合える協働学習を行った。

教材は、WEBニュースを主な読解資料とし、その都度日本社会で起こっている出来事や注目されている話題を扱った。そのため、学習シラバスは、教育終了時に完成する後行シラバスとなった。

2020年前期は、新型コロナ感染予防のために開始が遅れ、通常15回(1回90分)の授業が12回となった。12回のうち最後の3回はレポート報告を行ったため、反転授業は全部で9回であった。

##### 4.2. 反転授業の実施

本実践の反転授業は、図1のように、主に事前活動にMoodleを、授業でZoomを用いた。

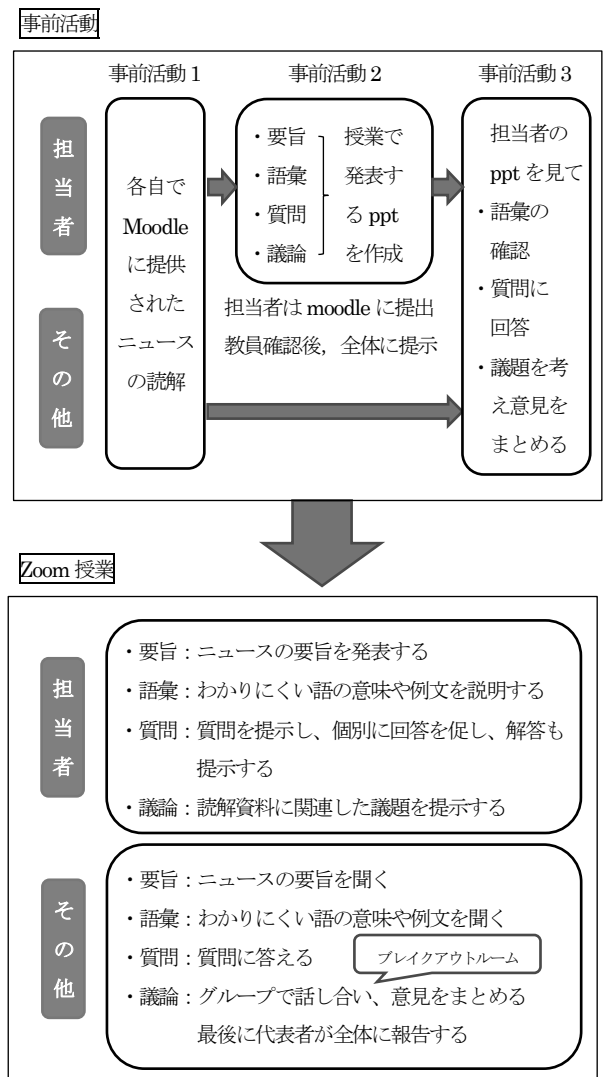


図1 本授業のデザイン

授業では、毎回同じ(あるいは関連する)テーマのWEBニュースを2~3つ扱った。WEBニュースはMoodleにウェブリンクを提供し、関連記事などの情報は、引用元を明記した上で必要な箇所のみを一部複製、または引用し、PDF資料とした(2020年度は、改正著作権法第35条にて、「授業の過程」で著作物を無許諾・無償で複製すること、公衆送信すること、公に伝達することが認められた)。

WEBニュースをより深く理解する方法として、Zoom授業では、要旨、語彙、質問、議論の担当者を決め、担当者が授業で他の仲間の理解が得られるよう、説明したり、活動を促したりする役割を担うことにした。扱うニュースは7回までは教員が選び、残り2回分はZoomの投票機能を利用し、7つの候補の中から学生が希望するものを2つずつ選んだ。さらに、最後の2回は、授業全体の司会進行役も学生に任せた。

Zoom授業を実施するための事前活動は、全員が行う事前活動1、担当者のみが行う事前活動2、再び全員が行う事前活動3と3つに分けた(図1の上「事前活動」参照)。

事前活動1は、まず、1週間前からMoodleに提供されたWEBニュースの記事を全員が読む。

事前活動2は、担当者だけの課題で、クラスで自分が担当者となる授業は3回のうち1回は必ず回ってくる。課題は、自分の担当箇所を授業で発表するためのPowerPoint(以下PPTとする)を作成することである(図2は第2回の授業で担当者が作成したスライド)。要旨の担当者は、ニュースの要旨をまとめ、語彙の担当者は、皆がわかりにくいと思われる語・表現を記事から抽出し、意味や例文を調べてまとめる。質問の担当者は、記事を読んで内容を確認する質問を3~4つ考える。議論の担当者は、皆で話し合いたい議題を提示する。担当者は自分の課題を授業の3日前までに終え、Moodleで教員に提出する。教員はチェックした後、Moodle上に担当者全員分をまとめてアップロードし、学生全員に事前活動3に移行するよう案内する。なお、要旨・語彙・質問・議論の分担は、当初は学生の希望を聞いていたが、2~3回目以降は偏りが生じないよう教員も介入していき、学生がその都度異なる課題を担当するよう、バランスよく決めるようにした。

事前活動3は、全員が担当者の作成したPPT(担当者は自分の担当以外のもの)を見て、予習する。要旨を読み、語彙を確認し、質問に答え、議論で発言できるように考えをまとめておくというものであった。

**要旨** 「このままでは学費払えません」

新型コロナウイルスの感染拡大の影響で、バイト数が大幅に減って学費を支払えない学生は多くなってきた。このため、国も、各大学も、対応に乗り出している。文部科学省は3月17日、全国の国公立や私立の大学や短大などに、経済的な理由で修学が困難な学生を支援するように通知した。それに、入学金や学費の支払が免除や減額されるなどいろいろな制度を実施している大学が多い。

また、法律によると、売り上げや客の減少で、勤務に入るはずだったシフトを減らされてしまった場合、学生も休業手当を受け取ることができる。会社側は、売り上げが減少するだけでなく休業手当の支払いも求められるとき、「雇用調整助成金」を活用できる。

会社も、学生も自分自身に関わる法律を積極的に知るべきだ。

**語彙**

- ・自粛：自分で自分の行いを慎むこと。
- ・掛け持ち：二つ以上の仕事や役などを受け持つこと。
- ・およそ：大体のところ。約。
- ・猶予：I：ぐずぐずすること。  
II：期限を延ばすこと。

**質問** 1~4の問題を考えてみます。

1. 「雇用調整助成金」とは何ですか？
2. 入学金や授業料の減免の制度は何ですか？
3. 入学金や授業料の納付が困難な学生に対してどのような要求をしますか？
4. 新型コロナウイルスの感染拡大による売り上げや客の減少で、勤務に入るはずだったシフトを減らされてしまった場合、その分の給料はどうなるのでしょうか。

**議論** 『このままでは学費払えません』テーマ

「生活費は親から仕送りしてもらっていますが、年間50万円余りの学費はすべて自分で払っています。」

↓

テーマ1：みんなの学費と生活費は親から仕送りしてもらうのか、自分でアルバイトをして稼ぐのか

図2 事前活動2の要旨・語彙・質問・議論の担当者作成スライド(第2回「このままでは学費払えません」2020.5.21の授業より)

Zoom 授業では、要旨、語彙、質問、議論の順に、担当者が事前に準備した PPT を用いて発表していった（図 1 の下 **Zoom 授業** 参照）。要旨、語彙の発表中、他の者は聞くことに重視し、発表後に質疑応答を行った。質問の担当者は、自らの質問に対して、ランダムに学生を指名し、答えてもらった。質問には 9 割以上答えられていたが、異なる解答が出た場合には、解説も行った。議論はブレイクアウトルームを使い、10～15 分ほど話し合った。グループでの話し合いの内容は、議論後、グループの代表者によって全体に報告された。グループ分けは自動的に割り当て、17 名を 1 グループ 4～5 名か 3～4 名に分けた。残りの時間に余裕がある時は発表のグループが 5 つとなる 3～4 名に、余裕のない時は発表のグループが 4 つとなる 4～5 名に分け、時間調整を行った。

### 4.3. 折衷シラバス

本授業のシラバスは、日本事情という内容からトピック・シラバス<sup>4)</sup>に該当する。しかし、本授業の目的は、日本社会や文化に対する理解を深めることに加え、総合的に日本語運用能力を高めることもあるため、日本事情とそこで扱われる語彙・表現の他に、読む・書く・話す・聞くというスキル・シラバス<sup>5)</sup>も折衷された。前者が授業後に完成する後行シラバスで、後者が授業前に作成する先行シラバスである。

先行のスキル・シラバスは、大学のオンライン授業で必要と思われる四技能の下位技能を挙げ、表 2 のようになった。本授業における下位技能を具体的に挙げると、全員が毎回、「ニュースを読む」、「担当者作成の PPT（要旨・語彙・質問・議題）を読む」という読む技能や「授業後のコメントを Moodle に書く」、「質問やトラブル等が話せない、話しぶらい場合、チャットで書く」という書く技能、「質問に答える（自主的、または指名された場合）」、「グループで議論する」、「グループでの議論を報告する（代表者）」という話す技能、「発表者の要旨・語彙の意味・質問・議題を聞く（文字情報有）」、「その他の質疑応答を聞く」、「グループの議論で他者の意見を聞く」、「教員のコメントを聞く」という聞く技能がある。担当が回ってくると、「自分の担当の要旨・語彙の意味・質問・議題を PPT にまとめて書く」という書く技能や、「担当の要旨・語彙の意味・質問・議題を発表する」などの話す技能も加わった。

後行のトピック・シラバスは、本授業の終了時に表 3 のようになった。トピックは医療・労働・科学技術・スポーツ・教育・社会保障問題と、比較的バランスよく多様な分野を扱うことができた。語彙・表現に関しては、学生自らが抽出したものであるため、コースを通して難易度に考慮した序列にはならなかったが、今の日本社会を語る上で使用頻度が高いものとなった。また、8～9 回においては、これまで扱っていない 7 つのトピックから、Zoom の

表 2 先行のスキル・シラバス

	読む	書く	話す	聞く	
	事前活動		Zoom 授業		
下位技能	<全員> 1. ニュースを読む 2. 担当者作成の PPT（要旨・語彙・質問・議題）を読む	<担当者> 1. 自分の担当の要旨・語彙の意味・質問・議題を PPT にまとめて書く	<全員> 1. 授業後のコメントを Moodle に書く 2. 質問やトラブル等が話せない、話しぶらい場合、チャットで書く	<担当者> 1. 担当の要旨・語彙の意味・質問・議題を発表する <全員> 1. 質問に答える（自主的または指名された場合） 2. グループで議論する 3. グループの議論を報告する（代表者） 4. 質問・意見があればする	<全員> 1. 発表者の要旨・語彙の意味・質問・議題を聞く（文字情報有） 2. その他の質疑応答を聞く 3. グループの議論で他者の意見を聞く 4. 教員のコメントを聞く（2～4 は文字情報無）

表3 後行のトピック・シラバス

	内容 / 記事のタイトル (出典 / 年月日)	語彙・表現
1	新型コロナウイルス感染症 (NHK WEB NEWS 2020.4.6) ①今免疫力を高めよう～新型コロナ, 感染への備え～	①フェア, 病原体, 白血球, 抗体, リンパ節, ペタペタ, 3つの密 (3密)
2	コロナ禍の就学困難な学生 ①このままでは学費払えません (毎日新聞 2020.3.26) コロナ禍の特定技能外国人雇用 ②こんなはずじゃなかった (毎日新聞 2020.4.1)	①自粛, 掛け持ち, およそ, 猶予, 乗り出す, 呼びかけ, いずれも, 手当, 売り上げ, シフト, キャンセル, 助成金, 長引く, 懸念, きめ細かい, 雇用調整助成金 ②二重苦, 特定技能, 模擬試験, 翻弄
3	AI ロボット (毎日新聞 2020.5.6) ①AI 花嫁に愛芽生え ②思わぬ喪失感戸惑い, ロボットと対話 自分知る手段	①キャラクター, バレンタインデー, 人感センサー, 紛らわしい, 直前, 筋トレ, 殺風景 ②あつという間, よそよそしい, やりとり, 水色, 点滅, レンタル
4	夏の甲子園中止 (毎日新聞 2020.5.21) ①球児の安全不安拭えず ②最後の夏願い届かず	①本格, 臨む, 要望, 過密, リスク, 招く, 見込み, 見通し ②致し方, 掴みとる, 声をかける, けじめ, 引つ張る, 引いてゆく, 見当たる, モチベーション
5	9月入学を考える (毎日新聞 2020.5.22) ①個別教育転換の好機 ②学習の空白解消が先	①大がかり, 拙速, 根強い, すっぽり, 抜け落ちる, キャッチコピー, 切羽詰まる ②再開, 埋め合わせる, 連休明け, 植え付ける, 罪深い, 闘い, 渦中, 狂わす
6	マイナンバー制度 (毎日新聞 2020.6.1) ①マイナンバー全口座とひも付け義務化検討 ②給付金で関心利用, 「国民監視」反発必至, ③口座で露払い	①ひも付け, 困窮, 徴税, 財源, 殺到 ②紐付ける, 切り札, 本丸, 反発, 一切合切, 漏洩 ③露払い, 補正予算, ハードル, 頓挫
7	コロナ禍の避難 (毎日新聞 2020.6.14) ①避難所コロナ備品不足 ②災害避難所 手探り	①備蓄, 品薄 ②重なる, 備え, 急騰, 押し寄せ, 身を寄せ, 調達, 行き渡る, 詰める, ソーシャル, 掛ける, エコノミークラス症候群, ハザードマップ
8	<学生の選んだテーマ> ①大学, 遠隔授業のみ6割 (毎日新聞 2020.6.7) ②SNSの個人攻撃はなぜ繰り返されるのか (毎日新聞 2020.5.24)	①受け止める, 心を砕く, つまづく, 気兼ね, 膨れ上がる ②相次いで, 配信, 着用, 突きつける, 慰謝料
9	③若者からヴィーガンが広まる理由 (毎日新聞 2020.5.15) ④「若い女性が政治を語る」ということ (毎日新聞 2020.5.22)	③極力, 畜産業, 培養肉, 柔軟 ④ジェンダーギャップ, 疑心暗鬼, 陳情, ムーブメント, スタンス, バッシング, 露呈, 言説, 散見, 支離滅裂, 参画, ジェンダーバイアス, マンスプレイング

投票機能で学生の投票を行い, 最も票数の多い4つのトピックを扱ったため, 8割以上の学生のニーズに叶ったトピックのシラバスになった。

## 5. 学生の振り返り

コース終了後, 学生に Moodle 上のアンケートで「前期の授業を振り返り, 意見・感想を述べてください」と自由回答で書いてもらった。学生の振り返りは, 複数の学生

に出現する語の内容を質的に分析するために、テキストマイニング<sup>6)</sup>を用いた。テキストマイニングのツールはKH coder というフリーソフトウェアを使った。全体的な授業の感想は主に形容詞の単語頻出度(表4)から分析し、四技能におけるコメントは動詞の単語頻出度(表5)や名詞の単語頻出度(表6)から分析した。なお、この学生の振り返りは、受講者17名中、研究に用いることに承諾が得られた14名分を対象としている。14名の自由回答の平均文字数は262字であった。

### 5.1. 授業全体に関するコメント

形容詞の出現回数の多い単語は、表4のようになった。「面白い」が5回、「楽しい」が4回と多く出現していた。どのような文脈の中で使われているかを把握するために、KWIC (Key Words in Context コンコーダンス)<sup>7)</sup>と呼ばれる方法を用いてその文脈を分析した。

表4 形容詞の単語頻出度

	抽出語	頻度		抽出語	頻度
1	面白い	5	6	重要	2
2	楽しい	4	7	少ない	2
3	いろいろ	3	8	大まか	2
4	非常	3	9	大好き	2
5	ホット	2	10	まじめ	1

その結果、「面白い」の文脈に、「この授業はリアルタイムの情報を伝え、いろいろな面を討論するため、語彙や文法よりとても面白い」、「生活に関連していて面白い」、「日本のニュースについて皆さんと話し合う機会があるのが面白い」、「クラスメイトとのグループ討論で違った観点が分かり面白い」、「知らなかったことがわかり面白い」というコメントが見られた。

「楽しい」の文脈には、「皆とグループ討論ができてとても楽しかった」、「他の学生と意見交換するのがとても楽しかった」、「ディスカッションしてとても楽しかった」、「一緒にこのバリアー(障害)を乗り越えて楽しくディスカッションをやったすごくいい」というコメントが見られ、すべて議論を肯定的に評価するものであった。

その他に、意見交換や議論に対して「有意義な授業」や「充実した授業」というコメントや、新たな知識を獲得したことに対して「嬉しい」や「幸せ」などのコメントも見られた。

### 5.2. 技能に関するコメント

動詞で出現回数が多かった単語は、表5の通りである。この中から、「読む・書く・聞く・話す」という四技能の動詞を取り出し、その文脈から学生自身の意見や感想を分析する。

表5 動詞の単語頻出度

	抽出語	頻度		抽出語	頻度
1	思う	10	12	楽しむ	2
2	知る	7	13	起こる	2
3	学ぶ	6	14	行う	2
4	読む	5	15	受ける	2
5	異なる	4	16	与える	2
6	書く	4	17	会う	1
7	分かる	4	18	会える	1
8	聞く	4	19	割り当てる	1
9	話す	4	20	感じる	1
10	違う	3	21	教える	1
11	見る	3	22	減らす	1

最も多かったのは「読む」で5回であった。「日本の新聞は縦書きでちょっと読みにくい」という否定的なコメントが一つあったが、他は「日本の各方面に対するニュースを読む練習を通して、日本語の読解力のある程度高めた」や「日本語のニュースを読むと同時に、要約の能力を鍛えて、語彙の量も増やせた」、「言語を学ぶ上で重要なことは、聞く、読む、書く、話すことで、授業ですべての領域を完璧にカバーできていた」、「各コーナーで言語学習の聞く、読む、書く、話すことができたが、それだけではなく3か月後に資料を探す能力や能動学習の情熱も増えていた」など、読むという技能の領域を超えて多様な技能を習得したコメントや学習意欲が向上したコメントも見られた。

4回で2番目に多かった「書く」では、「最後にレポートを書くのに使うのは、授業での知識だけではなく、獲得した能力もあると思う」、「授業後のメッセージに感想を書いたら、先生はいつも真剣に答える。先生とさらにチャットで討論してから、この授業の知識をよりよく理解し、把握することができた」という文脈が見られた。授業後のコメントには、毎回必ず教員からのコメントを返していたが、中には1往復で終わらず、双方が理解、あるいは納得するまで、何度かやり取りすることもあった。

動詞で同じく4回あった「聞く」では、「授業で他人の意見を聞くこともでき、それが日本だけでなく他国の視点からの意見も得ることができた」、「また先生の講義が聞きたい」というコメントがあった。

最後に同じ4回の「話す」は、「オンラインの授業だが、コミュニケーションの機会が全然減ってなく、話す能力が上がったという気がする」、「毎回の発表とその準備を通して、話す能力も読解能力も多かれ少なかれ上達した」などのコメントがあった。

次に、表6の名詞の単語頻出語を分析する。まず、四技能と関連のある単語を抽出し、その文脈を見ていく。名詞の出現回数の高い単語の中で、「話す」と関連がある単語が多く見つかった。その単語と出現回数は、「意見」、「討論」が7回、「発表」が4回、「コミュニケーション」、「ディスカッション」が3回であった。

「意見」に出現した文脈を見てみると、「自分なりに意見を考えてみたりしていた」、「他人の意見を聞くこともできた」、「他国の視点からの意見も得ることができた」であり、うち2つは「聞く」という技能を指していた。また、「自分の意見を発表することによって、その意見についてより整理できるような感じだった」、「他の学生と意見交換するのがとても楽しかった」、「ニュースごとに自分の意見を述べるのができた」は「話す」技能を示しているが、最後の「自分の意見を述べる」は「話す」と「書く」の両方が考えられる。授業のグループ討論では「話す」技能だが、授業後のコメントでは「書く」技能に該当するためだ。Zoom 授業の全体で行うグループ討論の報告はグループ内でまとめられた意見のため、個人的な意見については、個別に授業後に書いてくる学生がよく見受けられた。グループ活動の詳細を報告するという意図もある

のであろうが、グループで複数の仲間と話し合う場合と、教員に1対1で自分の意見を述べる場合は、使用する技能が異なるため、同じテーマで複数の技能が使われていることになる。同じ内容を異なる方法で繰り返し産出することで、そのテーマについて深く関わることができ、理解が深まったものと推測される。

また、「討論」においては、「楽しかった」というものが2つ、「より深く理解することに繋がった」、「深層的に勉強できた」という学習の深化に言及するものが2つ、「視野を広げた」「違った観点がわかった」「いろいろな面を話せた」という多様な視点・観点に関するものが3つあった。

「発表」については、そこから「グループ討論に広がった」というコメントが2つ、また「話す能力が上達した」というものや「自分の意見が整理できた」というものもあった。これらから、発表するという技能は、単に「話す」という技能を伸ばすだけでなく、自己の意見を整理し、他者との話し合いに発展させる効果があることが示唆された。

「コミュニケーション」においては、オンラインのコミュニケーションであっても「機会が減っていない」、「とても便利だ」、「顔と顔を合わせてするような感じ」と3つとも肯定的に捉えていた。

「ディスカッション」では、「楽しかった」、「すごい」、「充実した」というコメントが見られた。

以上、名詞の頻出語彙の中からは、「話す」に関連する語が大半で、動詞の頻出語と合わせると、「話す」技能に関する肯定的なコメントが顕著に現れた。

表6 名詞の単語頻出度

	抽出語	頻度		抽出語	頻度		抽出語	頻度		抽出語	頻度
1	授業	41	12	能力	7	23	文化	4	34	資料	3
2	先生	20	13	機会	6	24	お世話	3	35	生活	3
3	ニュース	19	14	理解	6	25	コミュニケーション	3	36	他	3
4	学期	16	15	皆さん	5	26	ディスカッション	3	37	読解	3
5	社会	13	16	知識	5	27	影響	3	38	オンライン	2
6	勉強	13	17	内容	5	28	疫病	3	39	コロナ	2
7	日本語	12	18	学生	4	29	感じ	3	40	コントロール	2
8	自分	8	19	語彙	4	30	感謝	3	41	一緒	2
9	グループ	7	20	新聞	4	31	言語	3	42	課程	2
10	意見	7	21	発表	4	32	国	3	43	学習	4
11	討論	7	22	疲れ	4	33	最後	3	44	顔	4



### 5.3. 共起ネットワークからの分析

最後に、抽出語間の共起性を分析することができる「共起ネットワーク」から分析する。その分析結果が図3である。共起ネットワークでは、抽出語間の共起性の強さは図形の位置や近さではなく、線で接続されているか否かとその太さで表現される。

まず、5.1.で見た「楽しい」は「機会」と共起している。この「機会」とは図3から判断すると「話す機会」である。また、「面白い」は「異なる」や「日本語」と結びついている。その「異なる」は「グループ」「分かる」、「知識」、「疲れ」と結びついている。この「異なる」は、5.2.で言及したグループ討論で視点や観点の違いの発見であり、そこでの討論によって、知識や理解が得られることが示唆される。しかし、「疲れ」という語は一体何を意味するのであろうか。これまでにない否定的な語であるために気になり、KWICでその文脈を調べてみると、全て「お疲れさまでした」という教員へのねぎらいの言葉であった。これは、最後の授業のコメントであったことが影響しているのだが、図3の下方のかたまりにある「先生」と「ありがとう」の結びつきと同類のメッセージと考えられる。

ここで、「ありがとう」よりも「先生」との共起の頻度の高い「授業」に目を向けたい。この授業は、学生主体の授業を目指していたにもかかわらず、「先生」と「授業」が共起したコメントが多く見られた。また、5.2.の表6の名詞の単語頻出度にも2番目に多く20回も出現してい

た。その使われ方をKWICで分析してみると、5回は「先生の授業」という連体修飾語としての用法で、授業の感想を述べる際に使用されていた。次に、教員の取った行為に関するものと教員への感謝の表現がともに4回ずつ、そして、教員の態度に関するものが3つあった。残りは、「学生にとっても、先生にとっても大きなチャレンジだった」や「先生とたくさんの知識を学んだ」という教員とも協働で学習できたというコメントや新型コロナに感染しないようにという注意喚起、そして、単なる呼びかけとしての使用が見られた。ここに、「高次能力育成型」の反転授業が、マネジメントする担当教員の力に大きくその成果が依存している(森 2015)という特徴が表れており、授業前のデザインの段階から授業中に至るまでの教員の行為や態度が大きく関わることがわかった。

次に、四技能に目を向けたい。「話す」は「内容」、「発表」、「能力」と比較的太く結びついていた。これは、5.2.で触れた学生のコメントから、読んだ「内容」を「発表」することによって「話す能力」が向上した実感が持てたことが読み取れる。同様に学生のコメントから、「書く」が「分かる」と結びついたのも、「書く」ことで内容が整理され、理解が進み、「分かる」に繋がったことがうかがえる。「聞く」が「思う」と繋がったのは、他者の意見を「聞く」ことによって、お互いの違いに気づき、多様な「思う」という思考が生まれたためと推測される。「読む」が「本当に」と薄く繋がった理由は、この授業がまずニュースを読むことから始まる学習であったことで納得できる。これらのネットワークを見る限り、四技能は、理解や思考、

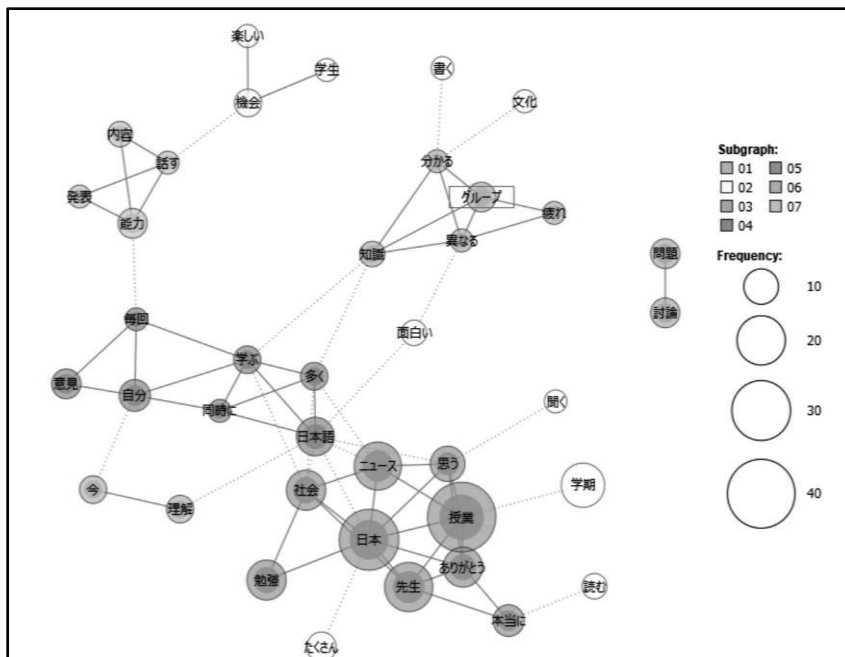


図3 共起ネットワーク

他の技能や能力への発展に薄い濃いなどの違いはあれども繋がっていることがうかがえた。

## 6. まとめ

本研究の「日本語と日本社会 A」における高次能力育成型反転授業の試みから、先行型のスキル・シラバスと後行型のトピック・シラバスの折衷シラバスが完成し、学生の主体的な参加により、「面白い」や「楽しい」などの肯定的なコメントが多く見出された。その肯定的な評価を引き出した要因に、リアルタイムの日本事情を知りたいという知的好奇心や、グループ討論で「話す」ことによって活性化されるインタラクションが考察された。国籍や専門、日本語習得度の異なる多様なメンバーとの討論の中で、異なる意見を面白いと捉え、教え合いながら理解し、自分の視野も広げることができたようだ。

また、「読む・書く・話す・聞く」の四技能において、対象や目的の異なる複数の下位技能を同じテーマで繰り返すことによって、学習の深化が進んだものと思われる。例えば、「書く」という技能では、事前活動の担当者作成のスライドはクラスの仲間全体に向けて新情報を伝えるための「書く」であるが、授業後のコメント入力や教員一人に対して理解した内容を報告するための「書く」である。学生の振り返りで期末レポートについて言及する者もいたが、大半の学生が授業で学んだ内容をさらに他の文献で調べ、自己の見解をレポートで「書く」ことができていたため、協働学習で学んだ内容は個々に深められていた。「話す」という技能では、授業でクラス全体に発表する「話す」もあれば、グループ討論など少人数の間で意見交換する「話す」やグループを代表して皆の意見を報告する「話す」もある。伝える相手の人数や役割の異なる下位技能を複数駆使した経験が言語を運用する技能の幅を広げ、伝える内容に対しての理解を深めたようだ。

さらに、四技能の技能を高めることができたというコメントに加え、他の技能への連結や拡大があったとのコメントも発見された。読解の技能から資料検索の技能へなど下位技能の間でも相互作用が働き、学習が能動的に行われる効果が表れていた。

学習した内容においては、広範囲に渡る多分野のトピックを扱うことができたが、語彙や文型の難易度に対する配慮はできなかった。しかし、旬のニュースを扱い、時代のニーズに合ったシラバスにはなったため、学習に対する能動的な姿勢が維持されれば、さらに発展した話題や関連した情報を収集し、より広い範囲の語彙や表現に接する機会が増えるものと思われる。

以上のことから、四技能の複数の下位技能を駆使する

高次能力育成型反転授業は、学生の主体性を高め、学習の深化に効果的であることが示唆された。しかし、この効果は個々の学生の自由回答の振り返りから得られたものであるため、クラス全体でどれだけの学生が同様の効果が得られたかという実態は把握できていない。また、コース開始時の状況を把握していないため、その効果が真に反転授業の協働学習におけるものなのかを客観的に言及することもできない。今後は、コース開始時からの毎回のコメントも分析の対象とし、コース全体を通しての変化も視野に入れた上で、クラス全体の学生において同様の効果が得られるかということを研究の課題としたい。さらには、どの下位技能がどの下位技能と結びつき、どのような学習効果を生むのかという四技能における下位技能間の関連性も質的に追及していきたい。

## 謝辞

本稿を執筆するにあたり、丁寧にご助言いただきました査読者の先生方に、こころより感謝申し上げます。

## 注

- 1)本稿では、2012年8月の中央教育審議会「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて(答申)」において述べられた「教員と学生が意思疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り、学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学修を「アクティブラーニング」と解釈する。(中央教育審議会 2012)
- 2)本稿では、館岡洋子(2005)に倣い、参加者が互いに働きかけあいながら協力して創造的な活動を行うという意味で、collaborationを「協働」と呼び(館岡 2005:95)、「協働」を重視した学習を「協働学習」と呼ぶ。
- 3)Zoomでミーティング参加者を別々に小さいルームに分けることができる機能。
- 4)トピック・シラバスとは、主として学習者が日本人と話をするときにどんなトピックが多く現れるか、そのトピックを中心に組んだシラバスである(田中 1988:94)。
- 5)ここでスキルとは、言語技能、一般に言語の四技能といわれる、話し、聞き、読み、書くというそれぞれの技能のことを言う。スキル・シラバスでは、その各々について具体的にどんな聞き方をし、どんな読み方をするのかといった下位技能、つまりマイクロスキルをあげ、そのマイクロスキルの中で学習者にとって必要なスキルをリスト・アップしてシラバス化する。(田中 1988:95)
- 6)テキストマイニングとはアンケート調査における自由回答のような文書形式のデータを品詞単位の単語に分解し、頻度を数えたり、統計手法などのいろいろな分析手法を駆使したりし、文書全体を理解するための方

法 (牛澤 2018). 近年, 内容分析の分野において, 数値化されていない文章のような質的データを分析する方法として新たに提案されている (樋口 2014).

7)KWIC (Key Words in Context コンコーダンス) を用いると, 分析対象ファイル内で抽出語がどのように用いられていたのかという文脈を探ることができる (樋口 2014).

## 参考文献

- 牛澤賢二 (2018) 『やってみようテキストマイニング—自由回答アンケートの分析に挑戦!—』 朝倉書店.
- 篠崎大司 (2014) 「日本語教員養成のための反転授業の実践と学習者評価—「言語一般」から「言語と教育」まで—」『日本語教育方法研究会誌』 21 (2), 34-35.
- 篠崎大司 (2015) 「日本語教員養成のための反転授業の実践と学習者評価—「言語と教育」から「社会・文化・地域」まで」『日本語教育方法研究会誌』 22 (1), 22-23.
- 鈴木靖代 (2018) 「オープン教材を活用した初級日本語授業における反転授業実践」『一橋大学国際教育センター紀要』 9, 59-71.
- 館岡洋子 (2005) 『ひとりで読むことからピア・リーディングへ: 日本語学習者の読解過程と対話的協働学習』 東海出版会.
- 田中望 (1988) 『日本語教育の方法—コース・デザインの実際—』 大修館書店.
- 中央教育審議会 (2012) 「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて—生涯学び続け, 主体的に考える力を育成する大学へ— (答申)」.
- 中溝朋子 (2017) 「留学生対象日本語クラスにおける反転授業の実践—中上級文法クラスにおける試み—」『大学教育』 14, 55-62.
- 中溝朋子 (2018) 「日本語中上級文法クラスの反転授業の実践—対面授業におけるグループ学習の状況—」『大学教育』 15, 14-24.
- 樋口耕一 (2014) 『社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して』 ナカニシヤ出版.
- 古川智樹・手塚まゆ子 (2016) 「日本語教育における反転授業実践—上級学習者対象の文法教育において—」『日本語教育』 164, 126-141.
- 森朋子 (2015) 「反転授業—知識理解と連動したアクティブラーニングのための授業枠組み—」『ディープ・アクティブラーニング』 勁草書房 52-57.
- 劉玲芳 (2020) 「近代日本人の生活文化を学ぶ—「明治・大正期の日本人の生活文化史」授業における取り組み—」『大阪大学日本語日本文化教育センター授業研究』

18, 21-31.

吉嶺加奈子 (2019) 「「日本事情」における Moodle および Google Classroom の導入方法—日本語人材を目指すタイ人日本語学習者を対象に—」『日本語教育方法研究会』 26 (1), 22-23.

## SUMMARY

This paper reports a case of higher-order thinking with an online flipped classroom for international students. Since it is a Japanese class that plays a role in bridging the specialized class of the faculty, it is a “higher-order thinking” role that allows students to use the vocabulary and grammar that they have already learned and to carry out advanced activities that make full use of the four skills acquired in the class. I designed a flipped classroom. In this flipped classroom, the materials were read in the Moodle pre-learning phase. The abstract was presented; the vocabulary was explained; the question-and-answer session was held; and the discussion was conducted in the Zoom class. The syllabus discusses topics and skills. The topics were provided by the teacher; the vocabulary and agenda were extracted by the students; and a posteriori syllabus was created. The skills practiced included reading materials in advance; summarizing them in PPT; presenting, questioning, and discussing them in class; listening; and writing comments after class. From the students' reflection after class, in addition to praise for the class as interesting and fun, the results of improvement of four skills and connection and expansion to other skills are also reported, making full use of the four skills even online. The possibility of a flipped classroom has expanded.

KEYWORDS: flipped classroom, higher-order thinking, four skills, process syllabus, Zoom, Moodle.

---

†Kayo Hayano \*: Attempt at flipped classroom for higher-order thinking about the Japanese language, making full use of four skills: Practice of collaborative learning using Zoom and Moodle

\* Faculty of Humanities, Mie University 1577

Kurimamachiya-chou Tsushi, Mie, 514-8507 Japan